SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

復本一郎著『さび：俊成より芭蕉への展開』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大嶋, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008873

復本一郎著
『さび―俊成より芭蕉への展開―』

大嶋　仁

夏目漱石の『道草』の冒頭や『永日小品』の英国の印象記などに「淋しみ」という言葉が出て来たとき、私はそれを英語の lonelinessに結び付けて読んだ。英文学者漱石を念頭に置いていたからである。しかし、この「淋しみ」は実は俳諧の「さび」とも深く関わっているのだ。そのことを思いついたのは、復本一郎氏の『さび』を読んでからである。

復本氏の新書版の著作『さび』は、この美学概念の系譜を実証的に辿って、しかも素人に解るよう懇切に記述した格好の入門書と言える。「さび」と「花」の二項対立構造の指摘に始まり、「さび」の系譜としての俊成、西行、利休、そして俳諧師たちの「さび」、また「さび」にまつわる風物、季節、人情に宗教…とおよそ「さび」に関する百科辞典の趣きである。

しかも巻末には日本美学の根本にある「幽玄」と「さび」の関係を論じ、研究文献一覧を掲げるなど、好学の徒への刺激を忘れない。新書版としては、これ以上望めないのではと思われるほど豊かな学識の達成である。

私は本書が「さび」を語ることによって、この概念の如何に日本文化史上に占める位置の大きいかを知ったばかりでなく、著書自ら強調するように、芭蕉はその「さび」の俳諧における達成であったことをも知り、日本文化史に一本の筋目をつけてくれた著者に感謝したい気持である。また、本書を読むにつけ思ったことは、このような文献本位の実証主義的研究があって初めて、「さび」という特異な美学の普遍相も、世界の美学一般に照らして明らかになるであろうということである。

漱石が「淋しさ」と言わずに「淋しみ」と言った訳は、復本氏がその『さび』によって教えてくれているように私は思う。「さび」は近代日本にも生きながらえている、それが本書の最大の教訓であろう。

（塙書房、昭58・7刊、七〇〇円）